神様と出会う二つの方法

虎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様と出会う二つの方法

【Ｎコード】
Ｎ６７０２Ｘ

【作者名】
虎鉄

【あらすじ】
人が生きるにあたって人生の転換期があるとしたら、春といえるだろう。特に桜が咲くのを「出会い」とすれば散るのは「別れ」というように、そんな比喩を今とっさに思いついてしまうほど怠惰で堕落、他人には無関心を貫く暇人、つまりこのぼくはこの四月の春、祐天寺神流（ゆうてんじかんな）と出会ってしまう。この出会いはぼくの人生の転換期というのだろうか？いわないのだろうか？まぁ、どうでもいいんだけどね。

プロローグ

あの日の彼女はいつもどおりであったと思ったが、今思えばどうもそれはぼくの勘違いであったようだった。

「いいな。今から問う三つの質問に答えろよ。ちなみに答えなっかたら殴る。応えなくても殴る。だから、率直に答えろよ、率直にだぞ。つまりは素直にだ。いいな、素直にだぞ」

ぼくの目の前にいる彼女、祐天寺神流（ゆうてんじかんな）はそう言った。

そう神流はいつもこうだ。なぜかというといつも唐突に質問や疑問を投げかけてくる。しかもけっこう要領得ないものばかりである。なんの因果関係があるかも皆目見当がつかない。

さらに、それらのぼくの答えが神流に気に入るようなものでないと蹴ってくる。鳩尾に。つま先蹴りが。タイ人顔負けのが。

そんなものはくらいたくはないので、ぼくは内心で覚悟を決め、神流の質問の内容を聞いた。

「うむ。ではひとつめなんだが……神様とは何だろうな……」

……ふぅ。

「人間は弱い生き物だ。だから人間が生み出した偶像には間違いないだろうけぶぇほ……」

み、鳩尾に蹴りが……。鋭い蹴りが……。なぜ？ホワイ？ボクナニカヘンナコトイッタカナ？

「そういうことをきいているんじゃない。もっとこう……、いやもういい。次だ。次の質問に移るぞ」

ちょっと待ってもらいたい。鳩尾にいいものもらったから、うまくしゃべれない。しゃべることができない。だから、ちょっと待って欲しかった。ていうかまだ答えきってないんだが……。

だけど、神流という女は、

「ほら、なに倒れているんだ。それは人の話を聞く態度ではない

だろう。早く立ちたまえ」
こういう奴なんだ。
ぼくはまだ鳩尾が痛むが嘆息しながらものっそりと立ち上がった。
ここで立たねば……おそらくは追撃がくるだろう。
「うむ。よし、ではふたつめだが、何で人間は死ぬのだ？」
……今日は特に脈絡のない質問をしてくるな……いったいどうしたのだろうか？
「人間に限らず、生あるものには死は絶対だろ。それをくつがえすことなんかおこがましいことだ」
まぁ、ぼくにとって「生死」ということなどに興味はおきんがな。
「やっぱり、そう……なんだよな……」
神流は上を向き何か物思いにふけった。
らしくない。
いつもの神流らしくない。
あの神流がするはずのない質問をしてくるだけでも異常事態だ。
「明日は雪が降るかもな」
「そんなものは起きん。ましてやまだ十月、雪も降らん」
ごもっとも。冗句をこうも真顔で答えるのはいつも通りだ。
神流はふぅと一息つく。
「最後の質問だが……」
神流は言いづらそうにぼくの方を向く。そのときの表情が少し硬く、不安な感じだったのをぼくは見落とさなかった。
神流は息を吸って、吐く。そして、訊く。
「神様と出会う二つの方法って知っているか？」
それから一週間後、祐天寺神流はいなくなった。

プロローグ（後書き）

初めまして。虎鉄といいます。
なんか思いついたままに書いてしまった作品です。暇なときにお気軽に読んでみてください。

？

ドアをノックする音が聞こえた。
それから声が聞こえてくる。未だに聞き慣れないその声は莉子さんの声だろう。
朝ですよ～、というその間の抜けた目覚ましは、余計に睡魔を誘わせる。
だけど、ぼくは、パチリと目を開く。そして、のそりとベッドから上半身を起こした。時計を見る。七時十分。目はまだ眠たげそうな感じだが、頭は逆に冴えていた。めずらしいことに。
それもそのはず、今日から新学期、学校へ行かなければならないからだ。
はっきりいうと、学校へ行くのはめんどくさい。歩くのはだるいし、このままずっと眠っていたいとさえ思っているほどだ。
だけど、これで……、
「……この家に居なくてすむな」
ぼくはぼそりとつぶやいた。

ぼくは学校指定の学生服に着替え、鞄を手にぶら下げ、自分の部屋を出て階下へと向かう。
途中、にゃあと鳴くぼくの飼い猫が寝転んでいた。
……十点だな。
「……クロエ。……行ってくるよ」
黒猫のクロエに手を振って階段を下りる。後ろで「いってらっさい」といってくれるようにクロエはにゃあと鳴いた。
……それにしても……二十点だな。シンプル、イズ、ザ、ベストだ。
一階の居間にたどり着くと、そこには、父と莉子さんがすでに朝食を摂っていた。

「……おはよう。父さん」
ぼくは父にあいさつをだけして、そのまま玄関へと向かう。だが、途中で父の言葉に止められた。
「待ちなさい。母さんにあいさつはどうした？」
厳格に言い放つ父。母……莉子さんはそわそわしている。
「……行ってきます」
ぼくは言葉だけ残して家をでた。

高校一年流れるがごとく流れ、早くも二度目の桜舞う季節。
ぼくは高校までの桜並木の通学路を歩いていた。
去年から歩くことになったこの通学路には、歩道の両側に桜の木が挟むように植えられていて、ちょうど今満開を迎えている。とても景観だ。
四月の春の風はゆるやかで暖かく、桜の花びらをぶわぁと舞い散らす。ひらひらとゆれて散っていくそれは人々の心を魅了する。
……だけど、花なんてものは二、三週間すれば力尽きて散っていく。それは人の心を魅了しない儚いものである。だからこそきれいに咲いているわけだがね。

歩くこと約二十分ちょいで、ぼくが通う私立神崎（かんざき）高校の校門前に着いた。
私立神崎高校は今年で創立五十年という古い歴史があり、偏差値が六十前後の県内でも屈指の有名進学校だ。それに加えて五年前に校舎を改装工事してきらびやかな新校舎となっている。
神崎高校にはもうひとつ特徴がある。校舎の後方にそびえ立っている大きな、とても大きな山が存在する。その山はこの町では神が住まう霊山としていわれている。定かではないが、山に住む神がこの学校の生徒を見守っているんです、と校長は言っていた。校長が言ったせいか、ものすごく嘘っぽく聞こえてしまったのを覚えている。

……まぁ、神がいようがいまいがどうでもいいんだけどね。
ぼくは校門から一歩踏み出す。この一歩がまた退屈な日々への一歩だとさえ思えてくる。憂鬱だ。
まわりを見回しても、どいつもこいつもまるで今日から輝かしい日々が始まるのだろう、というような希望や期待に胸をふくらましているような奴ばっかりなのに、ぼくという者は……
まぁ、いいんだけどね。
そんななかぼくの耳にだけ、とはいかないほどのささやき声が聞こえてくる。
「ねぇ、見てあの人」「きれい、モデルさんかな？」「……女神だ」「私もあと二十歳若ければ……くそぅ」
ふと眼をそちらに向ける。
桜吹雪の舞う中に、一人、女性が悠然とりりしく、美しく立っていた。
その彼女を含む光景はとても絵になっている。皆が見とれるのも無理ないなと思ったほどだ。
まぁ、そんな彼女も自分が注目されているのを自負しているみたいな感じがする。ほら、みなさい愚民共みたいな？
まわりが足を止めている最中、ぼくは踵を返し、クラス発表の掲示板へと向かう。
ぶるっ……。
なんか背筋に、冷たい視線を感じたような、感じなかったような、気がした。
後ろを向くが何もない。きれいな彼女と野次馬がいるだけだ。
はて？と思いながらぼくは前を向きどこのクラスかを調べる。
……あった。二年五組か……。他の奴は知らん名前ばっかだ。まぁ、覚える気もなかったけど……。
クラス確認を終えたので、そのまま玄関へと進み、指定された靴箱にスニーカーを放り込む。そして内履きに履き替えて、階段へと向かう。

二年生の教室は二階にある。今後、階段を使うことになるのかと思うとおもわずため息が漏れた。
……階段。地味に疲れるんだよな。
二階につき、L字型の通路曲がると、最初の教室が二年五組であった。
教室に入ると、まだ早い時間帯であるためか、人がまばらであった。教卓近くまで歩き、黒板に貼られてある座席表を見る。五列目の前から七番目、後ろから一番目、つまり最後尾だ。うん。悪くない。
まぁ、どこでもいいんだけどね。
……うそ、一番前とかいやだね。寝れなそうだし。
まぁ、一番前でも寝るんだけどね。
鞄を自分の机の脇にぶら下げ、机に突っ伏し軽く自分の世界に浸る。ああ、眠いな。
しばらく眼をつむっていたら、どうやら時間がたっているようだ。まわりがざわめいているのが耳に入ってくる。
顔を上げると、教室内には人がもう集まっていて、そこらかしこで数人ずつ集まって談笑している。
がらら、と教室の扉が開き、担任らしき人が入ってきた。
おはようございます、とあいさつをしてから「担任の水澤ゆかりです」と軽く自己紹介をした。
まわりの男子は担任が女性で、若く、そして美人ということで歓喜しあっている。女子もきれいで優しそうとかとささやきあっている。みんながみんな楽しそうにしている。笑顔に花が咲いている。
ぼくは違うけど……
まぁ、ぼくには関係のないことである。
他人には興味がないし、興味が持てない。
おそらくぼくは……どこか欠落しているのだろう。
欠陥製品だ。
きっと、大切な、なにかをどこか落としてしまったんだろう。ま

るでカギを落とすかのように。ポロンと。
だから、このまま、ズルズルと、這いつくばるようにズルズルと、生きていく。まるで死んでいるみたいに、生きていく。
ズルズル、ズルズルと。
だと、思っていたんだが。
ぼくは。
息をのんだ。
有無を言わさないだろう眼光に。
人々を惑わすだろう美貌に。
圧倒的な存在感に。
そして何より……、その彼女が放つ異質さに。
祐天寺神流はやってきた。

？

祐天寺神流さんは東京の高校から母親の都合でこの神崎高校に転入してきました、と担任水澤先生が説明した。
さぁ祐天寺さん、と水澤先生が彼女に自己紹介を促す。
彼女は一歩前に出る。すぅっと、背筋を伸ばす。すらりとした長身の彼女から女性らしい高いソプラノの声音が教室に響く。
「うむ。祐天寺神流だ。これからよろしく頼む」
彼女の発した言葉は短く、堂々と、はきはきとして、そして、どこか威圧的であった。教室内がしぃん、と静寂に包まれる。だれもがあっけにとられていた。彼女の美しい容姿に、鋭い眼光に、響かせる声に、そして何よりその存在感に。全員が見惚れている。全員が見とれている。
まぁ、ただ一人ぼくという例外を除いてだけど。
静寂は何秒、何十秒、何百秒と続いているような錯覚に陥る。そんな静寂に見かねた水澤先生がおろおろと手をこまねきながら、「え、えっと……」と何かしゃべろうとしたとき、ふくらみ続けていた風船がわれたように、クラスメイトが発狂した。文字通りに。「キャー、かっこいー、ステキー」「女神キター」「ちょー美人、肌白〜い」「俺、このクラスになれて、良かった。……うっ、う」「泣くなよ」「髪さらさらそー」等々と彼女のことを闇雲に褒めちぎる。確かに容姿は群を抜いていると思う。顔立ちは端正で凛々しく、腰ほどまでに伸びている髪はつややかで美しく、すらりとした１７０ほどの身長はモデルをみるかのようだ。そしてその立ち振る舞いが彼女の美しさを際立たせている。
まぁ、どうでもいいことだがね。
今だ続く壮絶っぷりに彼女はふふっと軽くほほえみ「ありがとう」と言った。そんな仕草がさらに拍車をかける。より熱を帯びていく。彼女は困りも、照れる仕草もしない。ただ、温かく、見守るように

眺めているだけだ。
……ん？
ぼくは気づく。
彼女は……。
彼女は、ほんとうに温かく見守るような、愛ある母性的な瞳をしていただろうか？
彼女の眼を見る。
……。
まぁ、どうでもいいか。
水澤先生が必死にクラスをたしなめるとクラスメイトの熱は少しずつ冷めていき、落ち着き始めていた。では、と水澤先生が彼女に対しての質問しましょうか、と言い、クラスメイトは一気に彼女に質問攻めにした。だが、彼女は困るそぶりも見せずただただにこやかにしているだけだ。水澤先生はおろおろとしながら「一人ずつ、一人ずつ」と促す。そうしてどうにか彼女に対しての質問大会が始まった。
クラスメイトが彼女に趣味や好きなもの嫌いなものなどと定番な質問をかけていく。クラスメイト全員は彼女に対し興味がとてもおありのようで、ぼくには彼女に興味がない。
まぁ、確かに彼女に対してなんらかの異質さ？不自然さ？を感じたような気はしたが……。
些細なことだから、ぼくは流した。
ぼくは机に突っ伏す。眼を閉じる。耳からクラスの喧噪が聞こえる。それはぼくにとっての雑音。だが、興味がない授業で教師がしゃべるのが呪文か、子守歌に聞こえるように、クラスのざわめきはぼくにとっての子守歌。
……眠くなってきた。まどろみを感じる。ほんの一瞬何か視線のようなものを感じた気がしたが、睡魔がやってきた。ぼくを眠りに誘った。

？

誰かがぼくの肩をトントンと叩く。
んっ、と意識が目覚める。どうやらぼくは軽く寝入ってしまってたようだ。顔を上げ、うーん、と首を動かし、コキゴキと首をならす。けだるい気分だ。時計を見る。
……十一時五分。
……一、二限はＨＲ（ホームルーム）のはずだったから……、今は三限前か。
教室内には誰もいない。三限の授業はたしか音楽。ああ、移動教室か、と思い出す。だるいなと思う。サボっちまうかと考える。一、二限と寝てたことだし、と机に突っ伏す。
「君、いい加減起きたまえ」
ばしぃん、という音が聞こえた。ずきぃん、という痛みが頭に響いた。顔を上げる。そこには、腰に手を当て、ぼくを見下ろす女の人が立っていた。……こころなしか右手が赤くなっていて痛そうだ。
……はて？
「……どちらさんで？」
おもわず声に出てしまった。失礼千万だなぼくは。まぁ、いいんだけど。
「うむ？朝に自己紹介をしたはずなんだがな……」
そう答えた目の前の彼女は落胆やあきれる様子もなく、むしろ逆に好奇な目をしていた。まぁいいとうなずきながらにっこりとして言った。
「少し話があるんだ。つきあってくれ」
「……めんどくさい」
その受け答えに彼女はムッとする。
「少し話しがあると言った。場所はここじゃない方が良い。女の子の頼みを受けないのはやぶさかじゃないかい？」
彼女はまくし立てる。そして「ああ、それと」と付け足す。

「君が答えるべきである言葉は“はい”か“ＹＥＳ”の二択しかないから、肝に銘じておくように」
「……いいえ」
ぼくは間髪を容れず答える。
「拒否は認められておりません」
彼女はニコッとする。
「……人間には選択する自由というのがあります」
「私の前で法律など無謀極まりないよ」
胸に手を当てながら言う。彼女の表情は聖母のようだ。
「……ちなみに拒否したら」
「殴ります」
悲しいことですが、と付け足し、右手で拳を握る。そしてぼくを殴った。
「……いい右もってますね」
思いの外重かった。左ほほが痛い。というよりはぼくはまだ答えてすらいないのに。
「ふふっ。かのフェザー級ボクサー千石三国をも一発ＫＯさせる予定の自慢の右だからね」
ふふん、と胸を張って答えた。
「……千石三国はライト級だがな」
ぼくは左ほほをさすりながら軽く訂正を促す。
「Ｔｈａｔ，ｓ　ｒｉｇｈｔ（そのとおり）！」
「……いつまでこの問答をつつけるんだい」
嘆息しつつぼくは訊く。
「では、屋上へ行こうか」
彼女はそういって歩き出す。なんて話しを聞かない女だ、と思う。彼女はふと、立ち止まって振り向き「ああ、それから」と言い、「ついてこないとフェザー級三国もびっくりな右をおみまいするからな」と付け足し、ふふっと笑ってから再び歩き出した。
……。

ぼくはため息をついて席を立つ。
……三国はライト級だがな。ぼそりとこぼした。

時刻は十一時十五分。五分前にチャイムが鳴って、今歩いている渡り廊下には、ぼくと祐天寺さんの二人だけだ。今はもう授業中である。生徒は各教室で授業を受けていなければならない。だから、今、この場に授業を受けていなければならない生徒が二人廊下を歩いているのはおかしいのだ。要は、サボりである。
……。まぁ、ぼくは授業という授業はどうせ寝るのだから、さして問題はないんだけどね。
だが、この彼女、転校生は初日にして授業をサボるとはたいした度胸……とでもいうべきなのだろうか？とかくまぁ、ぼくはいまいち事情を飲み込めないまま祐天寺さんの後ろについて行く。彼女の歩くスピードは速くズンズンと先へ進んでいく。逆にぼくの歩みは遅い。ウサギとカメのようだ。だからといって勝てる見込みは何一つない。ぼくと彼女の距離はどんどん離れていく。自惚れや怠惰をしないウサギは全戦全勝だ。先を歩く彼女は急にピタリと止まり、振り返ってぼくとの距離を見計らってから言った。
「遅いな、早く来たまえ」
そう言い放ち、ズンズンと先へ行ってしまった。
……待たないんだ。……まぁいいけど。
ぼくはそのままのスピードで歩いた。

屋上に到達すると祐天寺さんは腕を組みながら、仁王立ちして待っていた。
「遅いな、君は、デートで女の子を待たせるような甲斐性なしなのかい？それは感心せぬな。改めるのを勧めるぞ」
……ひどい言われようだな。
「まあ、こちらが急に呼び出したのだからな、今日は大目に見ておこうじゃないか」

ふふっ、優しいだろといわんばかりのドヤ顔を浮かべている。
……そんなことより。
「……それで、ぼくに何のようがあるんだい？」
たかだか二時間前に転校してきて、接点どころか、面識すらも危ういはずなのにぼくを呼び出す理由が見あたらない。まぁ見あたって欲しくもないが……。それよりこんなとこを誰かに目撃でもされたら面倒くさいことになるのは十中八九目に見えている。だから、来たくはなかった。が、痛いのも嫌だ。結論、どうにもならないのである。
「ふふっ、そうだな、本題に入ろう」
彼女は胸を張って言う。
「君のことが知りたい」

……。しばし思案する。
「……それは告白かい？」
ぼくはただ淡々と訊く。
「ああ。ただし恋愛感情の類ではないぞ。知的好奇心というやつだ」
彼女も淡々と答える。
「……じゃあ、ぼくの何が知りたいのかな？」
「君は……、他人というものに興味がないだろ」
……。
「……なぜそう思う」
「女のカンさ」
……この女ドヤ顔で言い切った。……まぁ、あたりだが。
「……用件はそれだけ？なら失礼するよ」
ぼくは返事もせず踵を返す。こいつに関わるとなんだか面倒くさいことになりそうだな、と直感した。早々にこの場を退散せねば。
だが、
「待ちたまえ」

がっ、とぼくの肩がつかまれる。
しくったなと、思った。
この流れは……。
「君のことを知りたい、と言った。わかるかい？女にここまで言わせて何も答えずに立ち去ろうとするのかい？それは男としてどうだい？ここまで言えばわかるよね？空気でわかるよね？私はね、君を校庭で見かけたときから君がなんか普通とは違う雰囲気を持っているなと思ったんだよ。教室で君を見つけて、君の目を見たらよくわかったよ。普通の人と違うものを見るような目だもの。
私は、君のことが知りたい。君はどんなことを考えているか？どんな風に生きているか？なんてことをさ。それに……。まあいい。だから、今後、これから君は私とつき合ってもらう。ふふっ、これは決定事項だよ」
彼女はぼくに指を向けて言った。
……面倒なことになった。もはや考えたくもない。
「ああ、それから」と彼女は付け足す。
「先に言ったとおり、君の選択肢は“はい”か“ＹＥＳ”。どちらかだよ。よく考えてね。ふふっ」
……本当に面倒なことになった。

?

学校中に本日の授業の終了を告げるベルが鳴り響いた。キーンコーンカーンコーンと鳴り響く。

その音でぼくは目を覚ました。午後の授業も全部寝て過ごした。学生にとってはあり得ないことだろう。だがぼくにとっては授業というものに興味が無く、担当の教師の熱弁もどうも思わない。勉強は自分のためだと教師は言うが、どうも自分のためだとも思えない。だからか、ぼくは授業を寝て過ごしている。今までも。これからも。それに授業はつまらない。暇である。寝て過ごす方が有意義といえるだろう。だが、それでは教師は納得しないであろう。だからぼくは処世術として睡眠学習を覚えた。ただ寝ているのではない。そういうことにしている。

まぁ、事実としてぼくは他人よりも頭脳は優れているため、そこら辺はもうあきらめられているらしいが。まぁ、気にもとめないんだがな。

前担任は、どうやら困っていたらしいが、そんなことに興味はないし、どうも思わない。人間というのは最終的には自分自身のことを優先するのだ。他人は関係ないのだ。そういう生き物なのだから。言える言葉は一つだ。「どんまい」だ。

……帰るか。

そう考えた。その時「どこに？」という心の声が聞こえた気がした。女の子の声だ。ぼくの欠陥。ぼくの心に？頭に？ささやいてくる気がした。「帰る場所なんてあるの？」と。

ぼくはそのささやきにいつものように答える。帰る場所はある。だが、居場所が無いだけである。居場所を作る予定も探す予定もない。今も、これからも。だから、ただぼくは彷徨うだけである。ゆらゆらと。ただ漠然と。

よいしょ、とぼくは席を立つ。帰る準備をする。準備と言っても

鞄を持つだけだ。机の横にかけてある鞄を取って……。あれ？ない？鞄が。ない？何故？

席に座りほんの数秒思考を放棄してみる。そして、何が起きたかを思い出す。

……。鞄を持って来忘れた？それは……ない。昼にはあった。どこ置いたのだろうか？

再び思案する。が、思いつかない。どうしようと慌てるわけではないが、不思議だと思っている。でも、まぁ、ぼくの鞄があろうとなかろうとあまり重大なことではない。ぼくの鞄には何も入っていない。もってきた教科書の類は、すべて机の中。筆箱もだ。つまりは、持ち帰るものは何もないのだ。そう考えると、別になくてもいい気がしてきた。だが、それでも自分のものがなくなったのは気になる。自分ではないと仮定してみる。置き忘れたとかではなく、他人がやったのではと憶測を考慮してみた。クラスの誰かがやったとすると仮定する。……候補が一人挙がった。というかあの女しかしない気がしてきた。それを踏まえ結論を出した。

……帰ろう。面倒が起きる前に。

席を立ち、教室内を見渡す。放課後になり、帰宅する人、部活に励む人、教室内に残り友達とおしゃべりをする人たちなど様々な時間を過ごすため、人はまばらであった。その中にあいつがいるかを確認する。……いない。今が好奇と思い、そのまま教室の出入り口に向かう。教室の前側の扉を開く。そして、教室を出て、階段へ向かおうとする。だが、階段で祐天寺さんが立って待っていた。嫌な予感がしてくる。彼女はニコニコとしている。彼女をよく見ると右手に見覚えのある鞄を持っている。ぼくの鞄だ。予想的中。悪い方に。

「やあ、何かお探しかな？」

彼女は気さくに声をかけてくる。ぼくはよくまぁぬけぬけと言えたもんだなぁとある意味感心する。

「……いや、何も」

「君が探しているのは、この金の鞄かな？それともこの銀の鞄かな？それともこの普通の鞄かな？」
ぼくの言葉を無視して、彼女は小芝居を始めた。どう手に入れたのかわからない金と銀の鞄を見せて、最後にぼくの鞄を見せながら訊いてくる。それにぼくは、
「……」
答えない。
あきれたように彼女を見る。実際、あきれているし。その彼女はというとぼくにお構いなしにしゃべる。
「ふふっ、君の視線から察するにこの普通の鞄だね。ご名答～。正直者の君には普通の鞄だけでなく、この金と銀の鞄もあげようじゃないか」
……いらねぇ。
そう思いながらもすでにぼくの腕の中には三つの鞄が収められている。彼女はふふっ、と満足気だ。続けて彼女は言った。
「あと私と一緒に帰ってあげる権利を上げよう。うれしいだろ」
「……いや、別に」
彼女の言葉に抑揚もなく答え、鞄三つをもって帰ろうとする。が、彼女にまたも阻まれる。
「全く君は、こんな美人が一緒に帰ろうと言っているのに……、すこしは喜びたまえ」
彼女はため息を一つつく。
「……別に、興味ないし」
ぼくは無感情に、無関心に言う。
「まあ、君の興味はともかくとして、だ。女の子一人で帰宅するのは何かと不安だろう、春だし、変な人に絡まれるかもしれない」
……ぼくは、今まさに絡まれているのだが。
「そうならないためにも、頼りになる男の子いないかなぁ」
チラッとこっちを見てくる。白々しい。だが、そこまで言うなら
と思い、答えてあげた。

「……さようなら」
彼女の脇をすり抜けようとする。
「待ちたまえ」
ガシッと腕をつかまれた。ぼくの腕に彼女の指が食い込む。握力が女性のものと思えない。
「……ナンデスカ？」
彼女の握力に驚き、カタコトになった気がするが気にしない。
「君にあれこれと言っても意味はないのだな……。よく分かったよ。ならば、私も手段を選ばない。君！」
……嫌な予感しかしない。
「一緒に帰ろう！」
「……けっこうです」
「ちなみに、一緒に、帰らなかったら、君を殴る」
右拳を上げて言う彼女。
ぼくはそれにため息で答えた。

時刻は四時四十五分。現在僕らは校庭を歩いている。下校時間のピークは過ぎて、人がやんわりと少なくなってきたところだ。春の陽は、日中と違い気温が落ち着き、ほどよい気温だ。時たま吹く風は、春といえどまだ冷たく手がかじかむ。かじかんだ手を温めるために両手を制服のズボンの両ポケットに突っ込む。そうすると、最初は布越しに肌がひんやりとするが徐々に熱を帯び、温かみが増していく。校門を抜け、そのまま登校時と同じ通学路を歩く。そこには周りの人々、同じ学校の生徒も少なからずいる。それはいい。関係のないことだ。いつもの光景。
だが。
視線を感じるのは、ぼくが自意識過剰だからであろうか？
……そんなわけはない。

ぼくは、ふぅ、とため息をつき右にいる人を見る。祐天寺神流。彼女は人々の目を引きすぎる程の容姿をしている。その歩く姿も優雅で可憐といったところか、老若男女とわず振り向かせる。そして、目を引かれた者たちはこう思うだろう。キレイだ、モデルだろうか、と。そして、隣にいるあの男は何なんだ、と。おそらくは、というか十中八九思っているに違いない。なぜなら、妬みのような、恨みのような負の熱視線を感じているからだ。

……ああ、面倒だな。

ぼくは、ふぅ、とまたため息をついた。それに彼女は気づいて言った。

「どうした、ため息なんて。こんな美人と一緒に帰ってるんだから、にやけ顔はあれ、ため息することなどないよ」

「……はぁ」

ぼくは彼女にあきれつつ、ため息をついた。

「君……。ため息すると幸せが逃げるよ」

「……幸せではないので、関係ない」

「世に言う屁理屈だね。もう一回言うけど、美人と歩ける。こんな幸せはないだろう？」

「……人質を取られ、脅迫され、無理矢理一緒に帰らされて、幸せはない」

……そもそもぼくに幸せなどは訪れない。わかっているんだ。

そうこう言いながら歩いていると、視線がきつくなるのを感じた。周りの人が今にも人を殴り飛ばすような血走った眼（まなこ）をしている。どうやらあの不毛なやりとりをイチャついているようにとらわれたようだ。冗談ではないと思った。こっちは迷惑千万。加えて、見も知らぬ他人から理不尽な感情をもらうなど面倒だ。早く離れたい。

歩くこと数分で、分かれ道の十字路についた。向かって左に曲がれば住宅街。まっすぐ進めばそのまま土手と河原に。右に曲がればショッピングモールといった商店街だ。ぼくの行く道は左の住宅街である。問題は彼女だ。どっちへ行くかだ。

「私の家はこのままっすぐだ」
彼女は前方に指をさして言った。
「……ふぅん。ぼくは左なので、さようなら」
そう言い、ぼくは左を向く。が、右肩に手が乗った。彼女はニコニコとしている。
「まあまあ、そう言わず、途中まで送ってよ。ねぇ。こんな美人が頼んでいるのだよ、男としての返事は？」
「……さようなら」
振り切って帰ろうとするが、右肩に手が食い込む。とても力強く、ちょっとやそっとでははずせそうにない。もとい、逃げられそうにない。彼女はう～んと何か思案してから言った。
「そうだ、君が来ないなら、私が君について行こうじゃないか。どうだろう。ね。……嫌なら……分かるよね」
ぼくは本日何度目か分からないため息をついた。

?

彼女は嬉々として歩いている。その後ろをぼくは憮然として歩く。二人のテンションの差といえばいいのだろうか？目に見えるように高低がはっきりとしている。十字路の分かれ道をなかば強制的にまっすぐ進まされ、現在は土手の道を歩いている。土手から見える光景はなかなかに景観である。左手にはぼくが進むはずだった住宅街が見え、右手には広々とした川原が広がっている。その川原の向こうには川が流れている。加えて、今はもう夕方で、空は茜色に染まっており、川原の向こう側に見える夕日がだんだんと沈んできている。その茜空を縦横無尽にカラスが飛び回り、カァカァと日が暮れるの知らせている。ふと、彼女が足を止めて言った。

「ここはのどかでいい町だな」

「……そうか？」

ぼくは彼女の言葉に対して感慨もなくただ答えた。

「ああ、そう思う。都会なんかよりもずっといい。」

彼女は空を見上げ、しみじみと言った。

「それはそうと……、ここは神の住まう町というらしいじゃないか。それは本当なのかい？」

「……昔の人が作ったデマさ」

彼女がふと、思い出したように唐突として言ったのに対し、ぼくは彼女の期待に満ちた瞳に水を差すように身も蓋もない答えを返した。

「そうなのかい？ふ～ん。まあいいさ、デマでも何でもいい。聞かせてくれないか？その話しを。ちょうどこの先に公園があるんだ。ブランコに乗って、童心に戻りながら、ね？」

彼女は男も女もイチコロにしてしまうような微笑みをぼくに向ける。たいていの人であれば落ちるだろうその笑顔は、なるほどよくまぁ自分のことを美人だ、かわいいと自画自賛するに値するほどの

ものであろう。それほどまでの作り笑顔だ。賞賛に値する。だがぼくにはと言うと……。
「……面倒くさい」
ぼくはそのお願いをばっさりと拒否する。
「なら、話してくれれば今日は帰って良いぞ。うん」
「……まぁ、いいか」
その交換条件に応じてぼくは簡潔に語った。
ぼくらが住むこの神崎市にはある昔話がある。神崎市と命名されるずっと前のお話。ある二人の兄妹がいた。家族と一緒でその兄妹は幸せでした。だが、両親が突如他界してしまう。兄妹はまだ子どもでたった二人で生きることはできなかった。親類縁者はいなかった。当時はどこも貧しかった。だから、世間はその兄妹を見放した。見放された兄妹はどこを彷徨うがごとく放浪した。そして放浪し続け、ある山に迷い込んでしまった。そこで三日三晩彷徨い着いたところには、一本のたいそう立派な桜の木が満開である場所だった。兄はキレイだと喜んでいたが、妹はすでに事切れていた。兄は泣いた。わんわん泣いた。兄は叫んだ。ぼくの命をやるから、妹を返してくれ、と。神様に頼んだ。そのとき満開の桜が散り始めた。そこで兄も事切れた。だが、このとき桜の木の下には事切れたはずの二人の遺体の内一つが消えてしまったらしく、その二人が亡くなった日を境に、その山では御子装束を着た女の子の目撃証言が出始めた。二人が事切れたところにはほこらがあり、その兄妹の妹が神様になったんじゃないかという噂が流れ、今に至る。
「……今でも、神様探しの人が山に登るくらいだ」
「なるほどな……、たしかに作り話っぽいな。ふむ……」
ぼくの話しを聞き、神流は何かぶつぶつ言いながら考え始めた。
「……やはり、ここであってるか……」
彼女は誰にも聞こえないくらい小さくぼやいた。その時ぼくは彼女の表情を見た。彼女の表情は、というよりその目は、どこか……異質なものであった。好奇心のような類の嬉々とした目ではなく、

どこか……鬼気とした目であった。そして、その目にはもう一つ寂しさのようなものにも見えた。
ふぅ、と思考を中断して、彼女はぼくの方を見て微笑んだ。表情はいつも通りになっていた。
土手を過ぎ、舗装されている道路に着くと二手の分かれ道になっていた。
「私の家はこっちだから、ここまでいい。ありがとう」
彼女は右手を横に伸ばし指を指し言った。そして、
「そうだ、最後に君に聞きたいことがあったんだ」
「……何？」
「うむ、君の名前を聞くのを忘れていたよ。ふふっ、悪いね」
……知ってたんじゃないのか。まぁいい、ぼくも……。
「……お互い様」
「そう……。ふふっ、やはり互いに自己紹介位しないとな」
彼女とぼくは向かい合う。
「私の名前は祐天寺神流だ。今後ともよろしく」
……名前を人に教えるのは何年ぶりになるのだろう。……どうでもいいか。
「……鏡、悠真」
「鏡悠真か……、そうか……。ふふっ、今日から君のことを悠真と呼んでやろう」
「……結構だ」
彼女はいきなりにも呼び捨てにしてきた。なれなれしすぎる女だと思った。
「遠慮するな。私のことも特別に神流様と呼んでいいぞ」
ぼくのことは呼び捨てで、彼女のことは様付け所望という偉そうな態度を取られた。だが、ぼくは嫌な顔一つせず無表情を貫いた。
彼女はふふっ、と笑い「冗談だ」と軽く詫びた。
「そろそろ頃合いだ、もう暗い。帰らなければ、な。では、また明日の朝な、悠真」

そう言って彼女は手を振り帰路をゆく。ぼくはその後ろ姿を見送ろうともせず元来た道を戻っていく。

……それにしても。名前……。……まぁ、どうでもいいことだ。

今日は最悪な一日だなと思った。終始、あの女のペースにはまり、成されるがままで、ここまで来てしまった。

だが、ぼくは……。

ある意味で何か特別な、もしかしたら……、というような不思議な気持ちが心の片隅の在るのを、感じたことを必要以上にひた隠すぼくがいたことをぼくは気づかなかった。いや、気づかなかった振りをしていた。

首をぐるぐる、と回す。辺りは夕日がすっかり暮れてしまい、暗くなってしまっていた。だが、住宅街の方面の家の光などにほどよく照らされ、道はしっかりと視認できていた。その明るさの光で土手下に上裸の男がいたような気がしたが気づかない振りをしてぼくも帰路を歩いた。

家に着くと今日はいつも以上に疲れている状態であったので、リビングにいるであろう父と莉子さんに挨拶もせず、自分の部屋に行き、ベッドで熟睡した。

明けて翌日。

ドアをノックする音が聞こえた。

それから、声が聞こえてくる。未だに聞き慣れないその声は……ん？

少し違和感を感じた。聞き覚えのない声だった。だが、やっぱりどこかで聞いたことのあるような声だったかもしれない。寝起きで頭の回転がうまく働かない。半ば寝ぼけている頭を動かし、ベッドから起きると同時にガチャリとドアが開いた。

祐天寺神流が部屋に入ってきた。

ぼくは頭が重くなるのを感じた。彼女はぼくの様子など気兼ねす

る様子もなくさわやかに挨拶をしてきた。
「おはよう。言い夢見れたかい？」
「……悪夢だ」
ぼくのつぶやきに、彼女はハッハッハッと豪快に笑い飛ばす。そして、キリッと顔立ちを凛々しくし言った。
「現実だ」
……。
どうやら、悪夢の日々が続くことを知らすその一言は、ぼくの朝一番の盛大なため息を誘発させた。

？

四月の第四週。

祐天寺神流が転校してから三週間の時がたった。

ぼくと彼女の関係はまだ継続している。大変遺憾なことながら。

三週間前に付き合って、といわれた日からぼくと神流は何かと一緒にいる。強制的に。クラスメイトは僕たちの関係について言及はしてこなかったが、風の噂では言い放題らしい。男子からは嫉妬や羨望の目で見られるようになったのは迷惑この上ないことだ。

僕らの関係は交際している、とのことらしい。大変遺憾なことながら。

だが、実際は違う。ぼくと彼女の関係は、例えるなら、姫と、従者。いや、姫と、奴隷？玩具？みたいなとうてい他人が考えていることとは違っている。彼女はぼくのことをどうとらえているかは知らないがぼくは彼女に対してうんざりしていて、呆れている。一体ぼくの何が気に入ったのだろう？たしか、ぼくの他人にたいしての無関心に興味があると言った。だけど、他人に興味を持たないなんて言う人間はざらにいる。ぼくということはないのだ。だが、この高校というコミュニティの中ではぼくしかいなかったのであろう。そうだろう。それしか考えられない。

ぼくは、ふぅ、とため息をついた。

ぼくはこの三週間を思い返す。

ここ三週間の間ぼくの周りは一変した。

まず、家庭環境。

朝。何故か祐天寺神流がぼくの部屋まで来て起こしに来る。たしかにぼくは朝が弱い。なかなか起きられないのは事実。だから、というわけではないのに、彼女は毎日起こしに来るようになった。「何故いる？」と訊くと、帰ってくる言葉は「一緒に登校しようじゃ

ないか」という返事だった。なんの脈絡もないその言葉から真意がさっぱり読み取れない。……怪しい。
この彼女の襲来に父は度肝を抜かれたらしいが、彼女の完璧な振る舞いからあの堅物から今後もよろしくとの返事が貰えたらしい。莉子さんは……どうでもいいや。
このようにぼくと彼女の関係は家族内でも確立されつつあった。大変遺憾なことに。

だが、とくに状況が変わったのは学校だ。
まず、登校二日目にそれは起こった。
ぼくらが一緒に登校するということ自体がもはや異常だったらしい。通学路を歩く途中に聞こえてくる会話はそれはそれは浅ましいものであった。主に聞こえてきたのは男子、女子生徒両者からの嫉妬、そして怨恨。時には呪詛のようなものまで聞こえてきたがそれは聞き流した。校庭に着くと全生徒達の注目が一斉に僕らに引き寄せられた。さすが登校初日でファンクラブができたほどの注目株だ（さっき女子生徒の会話がちらっと聞こえた）。そんな一日にして学校のアイドルの地位に半ば着いている彼女の隣にぼくがいる。それが、この学校のほぼ大半といえるだろう生徒（ファン）の火に油を注ぎまくっているようだ。
ぼくらが下駄箱に着き、靴を履き替えようとしたところで二人は異変に気がついた。神流の靴箱からはみ出していた。靴箱を開ける。それと同時に大量の手紙らしきものが出てきた。ラブレターというものであった。男子からも女子からも。よくはいったな、と思った。
教室に着くと、中は異様な空気が流れていた。ぼくらが教室に入るやいなや彼女は女子達に半ば引きずれるように教室の端に連行されていった。残ったぼくは興味がないのでそのまま何事もなかったように自分の席に着く……予定だったが、それはクラスの男子によって阻まれた。男子生徒の一人が口を開いた。
「おまえ！どういうことだ！なぜおまえが祐天寺さんと一緒に登校

してるんだ！」
その男子生徒の一言が口火となって他の男子もぼくに怒濤の質問を浴びさせる。
質問の内容はどれも同じであった。「何故一緒？」「付き合ってんの？」「羨ましい」等々であった。最後のは若干質問からずれた感想だが……。
とはいえ、ぼくにとっての最大級の異常事態だ。誰とも関わりたくないのに向こうからいけしゃあしゃあと絡んでくる。たまったもんではない。普通なら……普通ならこういう時はどうするんだろうな、とぼくは考える。だが、考えても考えてもわからない。だから、ぼくは、
……まぁ、どうでもいいか。
考えを放棄する。他人とは関わりたくないのだ。だれの質問も無視し、ぼくはその集団を押しのける形で席に着いた。席に着いたぼくは自分の世界に浸る。だれかが何かのたまっているが、ぼくの世界にそのさえずりは聞こえない。ぼくは外を眺め、ぼんやりとする。
その時、急に肩を掴まれる。だれだ、と掴んだ相手を見る。髪を茶色に染めている、いかにも遊んでいそうな感じの男子だ。たしか一番最初に質問をふっかけてきた奴だ。茶髪はなんか言っている。
「　　！　　！」。だが、自分の世界に入ったぼくには彼の言葉がどこか別次元の言語のように聞こえていた。彼が言っていることがわからない。だからといって自分の世界から出て、彼の言葉に耳を傾けるほど興味がない。彼はなんだかヒートアップしてきた気がした。未だ何を言ってるかわからないが、罵声、嘲笑を浴びているのはわかる。だけど、何もぼくの心には響かない。罵倒や罵声、嘲笑。そういったことにもぼくは何にも感じない。だから、ただただその言葉を放ってるであろう彼を見る。無表情に、無感情に、ただただ、見る。
茶髪はなんの返事も関心すらも向けないと業を煮やしたのか、右手を振り上げた。周りの生徒がなんか彼を止めようとする素振りも

目に見えた。殴られるのだ、と感じた。
だが、殴られる気配が一瞬でなくなった。現になくなったのだ。
祐天寺神流がその茶髪を殴り飛ばしたことによって。
茶髪は突然のことで何が何だかわかないまま呆けていた。だが、次にハッとし、殴り飛ばされたことに気づき、殴った相手を睨んだ。そしてその相手を見て驚愕した。彼は何かを彼女に向かって言った。
「　　？　　、　　！」
茶髪が何を言ってるか、自分の世界に浸っているぼくにはわからない。まぁ、どうでもいいが。
だが、ぼくは次、驚愕することになった。
「何故だって？君は、ぼくの友人に手をかけようとしたのだよ。それ以外に理由はいらない」
ぼくは、珍しく、ほんと珍しく目を見開いたと思う。
それは驚愕した証拠だ。
それは動揺した証拠だ。

それはぼくの心に響いた証拠だ。

ぼくは、彼女の顔を見る。そこには常ににこやかにして、周囲に愛想を振りまく表情はなく、憤怒。怒っている顔がそこにはあった。彼女はぼくを見て、少しうんざりとしたように言う。
「まったく、君も君だよ、悠真。あれだけ言われて腹は立たないのかい？」
「……いや、特には……」
そうかい、と彼女は苦笑いをしてから、茶髪に向き合った。その目は、侮蔑の目だ。茶髪は一瞬竦んだ。さて、と彼女は言う。
「私の友人に罵倒、罵声を浴びさせたんだ。剰(あまつさ)え、暴力すらも、だ。これは、どうしたものかな？私の友人に手を出すと言うことは私に手を出したと同義だな。うん、そうだな」
彼女が、茶髪の処遇について考えると教室の扉がバァンと開いた。

そして、ぞろぞろと男子・女子生徒の集団が入ってくる。何事かとクラス全員がそちらを向く。そして、集団の一番前の女子生徒が口を開いた。
「その男の処遇。私たちに任せてくれませんか？」
「君たちは、なんだい？」
クラス全員の疑問を代表したように彼女が訊く。
「私たちはあなたのファンクラブです。それで、今、祐天寺さんが危ないと、緊急連絡が来ましたので駆けつけた所存です」
「そ、そうか……」
珍しく、彼女はたじろいでいる。
「そうです。で、その男の処罰……」
「うむ。任せよう」
……任せるんだ。
彼女の許しを得たファンクラブ一同は顔をほころばせた。どうやら、彼女に影ながら尽くすことが信条のようだった。
ファンクラブは茶髪を引きずりながら教室を出て行った。茶髪は「助けてくれー」と懇願したが、誰一人と彼の目を見なかった。
教室に静寂が降りおちる。
その静寂を破るように担任水澤ゆかりが入ってきた。そして、クラスの生徒が全員立っている（一人例外で座っている）のと、なんか妙な雰囲気になっているのを感じ、疑問を口にした。
「あ、あの～、みなさん、なにかあったんですか？」
クラスメイト全員がお互いに顔を見て、あはは、と苦しく笑う。
そんな中の一人が水澤先生に言う。
「何もないっすよ。あったとしても、もう終わりましたよ」
「そ、そうですか。なら、いんですけど。それじゃあ、皆さん席に戻ってください。出欠を取りますよ～」
水澤先生が着席を促し、全員が席に着いた。それを見計らい水澤先生は出欠確認を始めた。
ぼくはというと……すこし考えていた。

自分の世界に浸っているぼくは、他人の言葉はわからなくなるのだ。これは他人に干渉しない、されないためにぼく自身が身につけた殻に閉じこもる方法だ。この不可侵領域は誰にも壊せない、壊れない、と思っていた。

でも、その殻をあっさりと、いとも簡単に砕いた女。

祐天寺神流。

彼女には確かに最初少しだけだが、気にかけた。だが、今は……。

いや。

ぼくは、その気持ちに否定を投げかける。

違う。ぼくは、他人に感心を持たない。干渉をしない。

あの日から、ずっと、そう生きてきたんだから。

だけど……。

今は、今は……。

何ということだ。

認めたくはないが。

どうやら。

ぼくは。

祐天寺神流に。

興味が湧いてしまったようだ。

登校二日目の事件以降は特に何事もなく過ぎていった。変わったと言えば、クラスメイトはぼくらのことをなんか温かい目で見守るようになった。ファンクラブの人からやたらと話しかけられるようになった（ぼくは一向に無視を続けているが彼らはそれを無視する）。茶髪がファンクラブの一員になった。席替えでぼくは窓側後ろから二番目、彼女はぼくの後ろとなった（その時のクラスメイトの目はもっと温かかった）。彼女とぼくとの関係が噂されるようになった。茶髪が黒髪に染め直した。そして何より……。

ところ変わって現在。
「おい、悠真、君、聞いているのかい？……聞いていなさそうだな」
彼女は思い返していたぼくにずいっ、と詰め寄ってくる。
ぼくはそれに顔を背けながらも答えた。
「……ちゃんと、聞いているよ。神流」
本当かい？と疑わしい目を向けてくる神流。
ぼくらは今土手道を歩いている。帰り道は神流を家の近くまで送ることが習慣化された。習慣というよりは義務？いや、いうなれば命令されたと言っても過言ではなかった。まぁ、それは今に限ったことでもなくて、この三週間ほぼ同じ毎日であったので神流がどんな女かというのは断片的に見えてきた。
だが、本質だけは見させない。この女の異質の根源。ぼくの殻を破るほどの異質。それが気になる。
だから、ぼくは未だ彼女と一緒にいる。
居心地が悪いわけではない。だからといって、良いわけでもない。
ただただ、一緒に居るだけ。
ただ、知りたい。この女とぼくの共通点というやつを。
この女が何故ぼくの世界に侵入できるのかを。
それを、知ってこそ、ぼくは再び殻に閉じこもることができるのだ。
あの無意味な日々を。
ぼくが生きているという罪を受け続ける日々を。
贖罪を受け続ける日々を。
取り戻さなくては。
ぼくは咎人なのだから。
そのためには……。
「……神流」
「うむ。そうだな」

ぼくらは分かれ道に着いていた。あたりはもう暗くなり始めている。ぼくらはお互い向かい合う。神流が右手を振る。左右にゆっくり。そして言う。

「また明日な」

ぼくは言う。

「……また明日」

ぼくらは踵を返す。

ぼくらはまた明日に会う。

出会い、そして、探り合う。

お互いの、目的のために。

そのような日々が続くのだろう、とぼくは沈みかけている夕日を眺めながらそう思った。

？（後書き）

とりあえずは一章終了です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6702x/

神様と出会う二つの方法

2011年11月26日23時46分発行